

昨年度 札幌、旭川は最多

事故や病気で亡くなったも縁者に引き取られない無縁仏が、道内の都市部で増えている。札幌市では、無縁仏として

引き取った遺体の数が昨年度、過去最多になった。秋の彼岸、だれに供養されることもなく眠る死者たち。遺族に代わって遺体を用う葬業者は、言いやうのないやりきれなさを感じている。「親族のきずなはごに行つたのか」。

引き取り拒む親族も

八月中旬、札幌市内の病院の霊安室。同市中央区の葬儀会社「極楽堂はなや」の社長中島浩明さん(四七)は、穏やかな表情で眠る八十歳代の女性をゆっくりとひつぎに移した。

同社は、札幌市の委託を受けて無縁仏を弔う唯一の業者だ。女性の親族が遺体の引き取りを断つたため、同社が市役所への手続き、火葬、墓地までの遺骨の運搬を代行した。「何度やっても、気

持ちが重くなります」。中島さんは、そう漏らす。札幌市が二〇〇六年度に無縁仏として引き受けた遺体の数は、統計を取り始めた一九九二年以来、最多の二十五体。札幌に

十一体と、過去五年で最も多くなった。道保健福祉部の調べでは、札幌、旭川、函館を除く全市町村では計十六体にとどまっております。都市部での多さが際立つ。

もともと天涯孤独だったり、身元がわからなかったり理由はさまざまだが、最近では「家族や親類が引き取りを断るケースが、以前より目立つようになつた」(旭川市福祉総務課)という。

親族の人間関係が希薄になつている。中島さんは、そう考えざるを得ない光景を何度も目の当たりにした。遺体を前にして「私は引き取りたく

ない」「おれもいやだ」と問答している親族たちの姿。何のためらいもなく、市に引き取りを頼んだ人もいた。「社会のゆがみを垣間見た思いがしましたね」。中島さんは振り返る。

札幌市の場合、遺骨は同市豊平区の平岸霊園の納骨堂に三年間保管し、引き取り手が現れなければ、墓を持たない遺骨を納める隣接の「納骨塚」に合葬する。この間に、縁者に引き取られていく遺骨は「極めて少ない」(札幌市保護指導課)という。

平岸霊園の納骨塚には八月末現在、二千五百五十七体が納められ、うち二百五十六体の無縁の霊が眠っている。



約2500体の霊が眠る平岸霊園の納骨塚。無縁仏も年々増えている＝札幌市豊平区